

西暦一世紀のローマ軍はダニエル書の「憎むべき荒廃者」の成就ではないという聖書的根拠
聖書の終末預言の中で、最も重要なキーワードは「荒廃をもたらす憎むべきもの」です。
この者、あるいはこれをもたらす者は、文字通りサタンの化身とも云うべき者で、その卑劣さ、狡賢
さ、邪悪さは、これまでの人類史上、この上ないもので、ヒトラーなどは比べものにもならないほど
の人物であると言えるでしょう。

これが、世界を制する時代、人間性を完全に逸脱した精神構造、サタンをそのまま受け継いだ人格特
性とその異常極まりない行動力を持つこの者が、世界を掌握する時が来る事を聖書は預言しています。
その時の世界が、どんな様相を呈するのか、人がどんなに想像力を駆使してさえ、恐らく、その現実
に比べればほど遠いと思える程の将来が、そう遠くない将来に人類を待ち受けている。
これが、「荒廃をもたらす憎むべきもの」について聖書が預言しているイメージです。
この者に関する表現が見られるのは、ダニエル8, 9, 11章と福音書のマタイ24、マルコ13の
各章です。

マルコでは「預言者ダニエル」に関する言及はありません。単に「憎むべき破壊者が立つ…」と述べて
いるだけです。ルカ21章では「エルサレムが軍隊に囲まれるのを見たら…」とあり、ダニエル書
の「荒廃をもたらす憎むべきもの」とのつながりを示す記述は何もありません。つまりマタイの24
章だけが「ダニエル」との関連を明確に示しています。

これらの聖句を順にすべて読むと、さすがに気が滅入ります。
しかし、このレポートの目的は、あなたを脅したり、憂鬱にするために書かれているわけではありません。
むしろ、歴史始まって以来の大型台風が近づいている状況と、その上陸が避けられないという
事実に対して、その進路や、停滞期間、消滅などに関する情報をできるだけ正確に把握できるように
することによって、災害をいかに身に受けないようにできるかを示すことにあります。
先ず、その情報に関するダニエル書の3つの章を新共同訳から引用してみましょう。

8:11「その上、天の万軍の長にまで力を伸ばし、日ごとの供え物を廃し、その聖所を倒した。」

8:13「日ごとの供え物が廃され、罪が荒廃をもたらし、聖所と万軍とが踏みにじられるというこの
幻の出来事は、いつまで続くのか」

9:26「都と聖所は次に来る指導者の民によって荒らされる。その終わりには洪水があり、終わりま
で戦いが続き荒廃は避けられない。」

9:27「彼は一週の間、多くの者と同盟を固め、半週でいけにえと献げ物を廃止する。憎むべきもの
の翼の上に荒廃をもたらすものが座す。そしてついに、定められた破滅が荒廃の上に注がれる。」

11:31「彼は軍隊を派遣して、砦すなわち聖所を汚し、日ごとの供え物を廃止し、憎むべき荒廃をも
たらすものを立てる。」

さて、これから、この3箇所に記載されている「荒廃をもたらす憎むべきもの」について、それぞれの
記述の違いや共通点を分析しながら、聖書が示す全体像を明瞭なものにしてゆきたいと思いますが、

この表現は長いので、これ以降は「荒憎者」と表現することにします。

まずは、その者がもたらす出来事の順番やタイミングという観点から、比較検討してゆくことにしましょう。

8：11、13は微妙ですが、「罪が荒廃をもたらす」を「荒憎者」と見なすと恐らく次の順で示されていると言えます。

常供の犠牲を廃止

荒憎者を据える

聖所を汚す

9：27も明確ではありませんが、およそ次の順番でしょう。

聖所を汚す

常供の犠牲を廃止

荒憎者を据える

11：31では、次の順で示されています。

聖所を汚す

常供の犠牲を廃止

荒憎者を据える

しかし、こうして見ると、これらの3つの要素は、記述の順番は曖昧で、出来事が起きる順番とみなせるほど明確ではありません。

また、その内容から言っても、これらは互いに関連していますから、ほぼ同時に起きることに違いありません。

8：13の「万軍が踏みにじられる」とは（ダニエル7章や啓示11章などの）聖徒が獣に渡される3時半の出来事と思われるので、聖所が踏みにじられるのも同じ時だと言えます。

9：27によれば、「常供の犠牲を廃止」ははっきりと「週の半ば」であると示されており、また、「荒廃」が「終わりまで続く」とあるので、これは後半の1260日に当たることは明らかです。

つまり8、11章の後半は主に最後の3時半の出来事についての記述で、前半の3時半については明確ではありません。

ダニエル書8章と11章はいずれも、ギリシャの4分割後の出来事として、そこから起こる、イスラエルに荒廃をもたらす王についての描写です。

アレキサンダーの後、ギリシャは四つに分割されますが、その4つが二大勢力に変化し、主な国はシリアのセレウコス朝とエジプトのプトレマイオス朝という構図になります。その内の一つ（北の王）が最後の終末期の主役、荒廃をもたらす者、反キリスト、小さい角、不法の人の役割を演じることになっています。

つまり11章の主な内容は、20節まではプトレマイオス朝とセレウコス朝の戦いが描かれ、21節以降はアンティオコス・エピファネスと、終末期におけるその最終版の行動が描かれています。

ダニエル書を読む限り、ここに、ローマや他の王（王国）は何も関わって来ません。

この預言の成就としては、シリアの王アンティオコス・エピファネスに、一部成就していることは周知の事実です。

しかし、エピファネスに成就しているのは8：24までと11：21－35あたりで、8：25や11：36以降は当てはまりません。

特に9章は、エピファネスには全く当てはまりません。

預言が成就するタイミングは、定められた70週のうちの残りの最後の1週の間起きるという限定で書かれていますので、それは未だ成就していません。

なぜなら、この預言は、「メシアの到来」やそれが「絶たれる」ことも全て、歴史の流れの中で、ただの一時、一度しかありえないからです。この記述は終末期（サタンが地に落とされてからキリストが再臨されて滅ぼされるまで）の期間にしか成就しません。

さて、次に問題になるのは、福音書にある、荒廃をもたらす者に関する言及です。

[\(マタイ 24:15\)](#)「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら——読者は悟れ——、」

まず、この言及にダニエル9章の記述は除外されることとなります。理由は上で述べた、タイミングがそもそも違うということです。

そして、当然のことながらこの時のローマはエルサレムを踏みにじった後、滅ぼされてもいません。

では、イエスは、この預言を語られた時、ダニエルの8章か11章のどちらの「憎むべき破壊者」を念頭に置いて語られたのでしょうか。あるいは、両方ともでしょうか。

すでに述べましたが、8章も11章も、ギリシャ後の王国から離れていません。端的に言って「ギリシャ」以外の要素が入り込むことを何も暗示していません。北と南の王も、どこまでいっても元々ギリシャで、「ギリシャの北陣営の王」と「ギリシャの南陣営の王」との歴史的抗争というのが、全体の構図となっています。

ですから、イエスが語られたこの福音書の「憎むべき破壊者」の言及をダニエル書の「預言の成就」という見方とは異なつたとらえ方をする必要がありそうだとということです。

少なくともイエスは、「その者が立つのを見たなら」という以外、その者の具体的な行動については何も触れておられません。

この記述をダニエル書の「預言の成就」（いわゆる聖書預言の特徴である、「二重預言」として、最初のとか、小規模にとかいうことも含めて）と捉えてしまうと、ダニエルの預言に「ローマ」が組み込まれることとなります。

そうすると少なくとも、「北の王」の内のどれかは、ローマの皇帝の誰かであると当てはめざるを得なくなります。

ダニエル書11章の記述の仕方は、預言の目的から言って、エピファネスの時から詳細になっています。まずその登場に関しても「代わって立つ者は卑しむべき者で、王としての名誉は与えられず、平穏な時期に現れ、甘言を用いて王権を取る。」(11:21)と述べて王が交代する時が、ちゃんと判るように書かれています。

さて、ダニエル11章21-35節は、前170頃のエピファネスに関する記述ですから、もし、西暦68年から70年頃の出来事、それをもたらしたローマ皇帝を探すとすると、36節以降ということになります。

しかし、どの節のどの部分も、直接、ローマの王に言及する部分とすることはできないようです。やはり 8 章後半もそうですが、「荒廃をもたらす者」に関する記述は終始一貫、ギリシャから離れることはないと言えます。

「そして、その王は…」(36)、「また彼は…」(37)、「また彼は、…」(39) と続き、40 節で「…終わりの時に、南の王は彼と押し合うが、これに対して北の王は…」とあり、ここで、時は終末期であることがさらに明確にされ、北の王は入れ替わることなく、そのまま最後まで、続きます。「彼はさらに…」(41)、「…それでも彼は…」(42)、「そして彼は…」(43)、「しかし、彼を…」(45)、「そして彼は…」(46)

以上のことから、先に述べた「イエスが語られたこの福音書の「憎むべき破壊者」の言及をダニエル書の「預言の成就」という見方とは異なつたとらえ方をする必要があり」という点を考慮しなければなりません。

さて、福音書とダニエル書の「荒憎者」双方の記述の類似点と相違点を今一度確認することはこの分析の助けになると思います。

先ず類似点は、行動の種類、またその者の人格特性です。つまり、簡単に言えば、聖なるもの（聖徒、聖所、聖都）を汚し、踏みにじることです。

逆に異なっているのは、時間的タイミングと、そこに設けられている「脱出」の内容です。

ダニエル書では、その期間中に神の民の「保護、脱出、救出」については何も触れていません。

西暦前 170 年頃のマカバイの時代の成就の際にも、そうした歴史的事実は起きていません。

ダニエル書の「荒憎者」に関する記述の目的は、啓示の書で「かつていたが今はいない、後に来る王で、少しの間留まる」と記されている者、つまり、ヨハネの時代（ローマ）の前にいて終末期の最後に躍り出る、不法の人、8 人目の王の、個人的プロフィールの紹介（卑劣で、超傲慢で、極悪非道な特質）と、その行動を詳細に描くという役割を持っている事が判ります。

ローマ版の「荒廃をもたらす者」はダニエル 8、11 章ではなく、9 章最後の、「きっかり 1 週という期間と、その半ば」という「時間的タイミングに関する情報」に注意を向けるためのものになっています。

つまり明確に姿を現して（42 ヶ月間権威が与えられると示されているように）荒廃をもたらす、前の部分（前半の 3 時半）の出来事として、一世紀の成就では、西暦 66 年に、エルサレムを囲み、短期間で撤退したのを合図に、クリスチャンは山へ逃げるタイミングを得ることができました。

しかし、この印を見ながら、軍隊は去ったからもう安心と思い山へ逃げることをしなかったユダヤ人は、3 年半後の西暦 70 年に殺され、捕虜となり、大規模な荒廃が生じました。

これに匹敵するのが、次の点です。サタンは地に落とされた後、直ちに「女を洪水で押し流そう」とします。しかし「地が救助に回り」「女は翼を与えられて荒野へ逃げ」安全を保証されます。

しかしここでも同様に、洪水（侵略のことと思われる）は去ったので、もう大丈夫と思った人は、「人々が、「平和だ、安全だ」と言っているその時、突然の滅びが、ちょうど妊娠している女に苦しみの劇痛が臨むように、彼らに突如として臨みます。彼らは決して逃れられません。」（テサロニケ第一 5:3）という事態が、週の半ばに起きることを経験することになります。

記述内容の類似点と相違点

| | ダニエル8章 | ダニエル11章 | ダニエル9章 | マタイ24章 |
|-----------|---|--|------------------------|---------------------|
| 人格特性など | 高慢で狡猾 才知にたけ 驕り高ぶり 真理を地になげうち 平然と人を滅ぼす | 神よりも自分を 高いとする。 | | |
| 行動／ふるまい | 日ごとの供え物を廃し 聖所を倒す 罪をはびこらせ 自力によらずに強大になり 驚くべき破壊を行い ほしいままにふるまい 聖なる民を滅ぼす | 甘言を用いて王権を取る 悪計を用いて同盟 ほしいままにふるまい 聖所を汚し 日ごとの供え物を廃止 憎むべき荒廃を立てる | 都と聖所を荒らす 洪水／戦い／荒廃 | 大きな苦難が来る |
| タイミ ング | | | 一週の間、同盟を固め 半週で犠牲を廃止 | 聖なる場所に立つ 山に逃げなさい |

それで、実際には西暦一世紀の出来事は、ダニエル書に預言されている「荒憎者」の預言成就ではないにも関わらず、イエスは、福音書の中でそのように述べることによって、「荒憎者」についての付加情報を与えられたのだということが判ります。

だからこそ、その部分に「読者は悟るように」というコメントが付け加えられているのでしょう。

つまり、ローマの軍隊を「ダニエル書で言及されている者」とすることによって、西暦66年、70年の成就と、終末期の成就に関して、時のタイミングや行動パターンの詳細を、ダニエル書に描かれる「荒憎者」つまり終末期の「小さい角」（反キリスト）の破壊された人間性や引き起こされる汚す罪などの情報にプラスする付加情報として与えられたと見ることができます。